

評・三浦 佑之

(古代文学研究者)
立正大教授

天才的琵琶奏者の、波瀾万丈と表現するしかない物語を楽しんだ。ただし、天才的琵琶奏者という説明は、「彼女」彼のの人生のごくわずかを言い当てているに過ぎないのでご注意を。

明治44年北海道に生まれ、大正7年父の死を契機に兄の住む東京に出た鶴田菊枝は、兄の勧めで、大正時代の大衆娯楽文化を代表する琵琶を始める。稽古嫌いなのに天才的な能力を発揮し、数年後には小学生ながら弟子をとり、一家を支える。信じられないだろうが、後の彼女の歩みを知ると、納得していただけるはずだ。

上田や高崎に居を移したあと、昭和4年に活躍の場を東京に求め、同8年22歳で弟子と結婚するも夫の浮気で2年あまりで離婚、生まれた二人の子は手放す。それと同時に人気は下降し始めた琵琶を離れ、喫茶店を始めとした水商売で成功し実業家へと転身。だが、数年後たたび琵琶にもどると海軍省委嘱の大陸慰問団に加わり、中国各地を回るなどして終戦を迎える。

旺盛な活動は止むことがなく、敗戦3日後には温泉地別府に乗り込み、占領軍相手のダンスホールやキャバレーを経営して大成功、40歳を迎えた27年には東京に進出。それを機に「女」

飛んでる琵琶奏者の生涯



1964年フジテレビで『飛んでる琵琶奏者の生涯』が放映された。主演は佐宮圭。この作品は、1964年17回、NHKの『NHK紅白歌合戦』で演奏された。

さわり

佐宮圭著

小学館 1600円

を捨てるとともに事業を拡大し、高級ナイトクラブには有名人たちが通う。ところが30年、またも琵琶の世界にもどり、3年後には鶴田錦史と名を改めて本格的に琵琶の演奏活動に入り、39年春、新進作曲家武満徹に請われて映画「怪談」の挿入曲を演奏する。この出会いが、42年にニューヨークで大評判となった「ノヴェンバー・ステップス」の初演へとつながる。この伝説的な演奏は、武満徹と鶴田錦史、そして指揮者小澤征爾を世界に知らしめることとなる。

そのうち映画かTVドラマになる本だと思いが、大雑把な足跡を辿るだけで紙幅が尽きた。これで皆さんに、鶴田錦史のとてつもない生涯と近代の琵琶人気の高揚とを描いた本書のおもしろさが伝わるだろうか、書評はむずかしい。